

ゆいのし しるしなげ 座光寺に結熨斗の印があるのは何故？

麻績会館の白壁に大きな茶色のマークが飾られているのをご存知でしょうか。同じ様な印が春祭の法被にも染めこまれています。この印は「結熨斗」と呼ばれるもので、江戸時代から座光寺に伝わる由緒あるものです。その昔、座光寺の若連中が「火消し」で大活躍した時に物語は始まります。

飯田の大火と座光寺の「火消し」

飯田の町は江戸時代から幾度も大火を経験しています。住宅がひしめく街中では一度出火すると瞬く間に燃え広がりが多くの建物が焼失してしまいます。火事は大変恐れられ、飯田領主（堀公）の悩みの種でもありました。

1831年（天保2年）6月24日夜、伝馬町1丁目より火の手が上がりました。この年は1月に105軒が焼失する箕瀬大火があり、町民は大変火事に気をつけていた時でした。

火事の知らせを受け、座光寺村から庄屋・村役人を先頭に若連中（火消し）が駆けつけ、夜明けまで大活躍し鎮火にあたりました。飯田ではその8年前（文政6年）に127軒が焼失する大火がありましたが、この度の火事では63軒の焼失に抑えることができました。消火に失敗すれば大変な被害になっていたところでした。

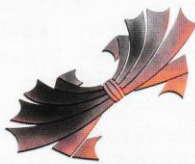
座光寺村の「火消し」は大火を抑えた功績により堀公から恩賞として酒一樽を賜りました。その酒樽に付けられていた結熨斗を、以後、若連中の目印として用いるようになったのです。

結熨斗ってどんなもの？

熨斗は今でもお祝い事で使う熨斗袋や、進物や贈答品を包む熨斗紙として生活に欠かせないものです。熨斗は熨斗袋・熨斗紙の右上に添えられている色紙の中にある薄い黄色の紙状のものですが、本来は鮓の肉を薄く削ぎ、火熨斗（アイロン）で引き延ばし乾燥させたものです。

「のし」は延寿に通じるため、古来より縁起物とされてきました。熨斗を幾枚も束ねたのが結熨斗です。

座光寺村が賜った結熨斗も鮓で作られていました。大きさは20cm以上、熨斗が幾本も結われ、たいへん立派なものでしたから、若連中には大いに喜び、その印を今に伝えました。



麻績会館の結熨斗

飯田の主な大火

西暦(和暦)	月日	出火場所	焼失
1762(宝暦12)	3月18日	番匠町(通り町1丁目)南側角より	493軒
1783(天明3)	2月30日	池田町角より	705軒
1799(寛政11)	6月11日	本町2丁目より	6町
1823(文政6)	12月23日	庄屋火事。箕瀬町より	13町1127軒
1831(天保2)	1月13日	麻績火事。箕瀬町より	105軒
1831(天保2)	6月24日	伝馬町1丁目より	63軒
1873(明治6)	7月25日	大塚町より	95軒
1874(明治7)	5月21日	知久町水戸屋火事	50軒
1893(明治26)	8月6日	光岡火事。道手町より	125軒
1894(明治27)	6月10日	池田町火事。池田町より	5町等161軒
1918(大正7)	5月30日	遊藝火事。二本松遊楽町より	45軒
1919(大正8)	10月15日	桜町2丁目火事	50軒
1922(大正11)	5月4日	愛宕坂火事	7町等358軒
1946(昭和21)	7月15日	飯田駅前火事	198軒
1947(昭和22)	4月20日	飯田大火。町町(南常盤町)より	4011軒

『飯田城ガイドブック』より



熨斗



結熨斗のスタンプ画

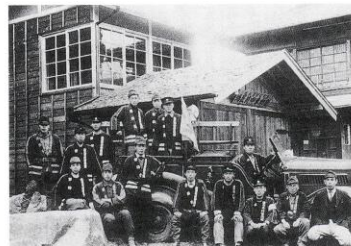
「火消し」から消防団へ

江戸時代、江戸には「火消し」の制がありましたが、元禄年間に飯田の町にも火消しの制ができたといわれています。飯田城下の火事には領内自動の決まりがあり、座光寺村でも火消し20人の規則が作られ、産土八幡宮（麻績神社）の若連中が主な担い手となりました。18世紀末（安永年間）には堀公から法被を揃えるよう法律が定められています。

1874年（明治7年）に若連中を改め「火消組」が結成されました。時に88名にもなる大きな組織で、1887年（明治20年）の石の大島居建設に当たっては火消組が大きくなり、火消組は村の行事の進行や有事の際の対応など村にとっては欠かすことのできない若者集団でした。



火消組が寄進した轆轤（奥の石段の前）



座光寺村消防団

火消組が母体となり1890年（明治23年）に「消防組」が成立し、この頃青年団ができました。戦争が近づく中、消防組は1938年（昭和13年）に国の指揮監督下で警察権のある「警防団」として再結成されましたが、戦後間もない1947年（昭和22年）に、警察から分離独立して「座光寺村消防団」として生まれ変わりました。管理責任が国から市町村に移り、現在の消防団の原型がこの年作られました。

結熨斗は今どこに使われているか

「結熨斗」は麻績神社若連中の法被や壮年団の旗に染め抜きがあり、春祭りの囃子囃子の飾りにも透かし彫りが見られます。最近では麻績会館白壁にレリーフが飾られ、麻績竹青の会の法被にデザインされています。

結熨斗の「結い」には住民の団結や助け合いの意味が含まれています。200年前に「火消し」が賜った結熨斗が今も私たちに引き継がれているのは何故でしょうか？ 歴史に学び先人達の気概に触れ、「結熨斗の印」を次代へ伝えてゆきたいものです。（湯沢次代）



法被の染め抜き



青年会秋季運動会優勝（二区青年会）大正10年

麻績神社の獅子舞について教えて

麻績神社にかかわる獅子舞の歴史を調べてみました。ところが、神社にも、地区内にも正確な年代を記した書き物を見つけることはできません。そこで、民俗芸能について詳しく研究されている先生方の本、また地区内にある明治生まれのお年寄りの話、それに古くから代々言い継がれている話などをともに書きました。これらを読み返して読んでください。

なぜ獅子舞があるの、またいつごろから始まったの

獅子は古い昔から、霊獣として人々にあがめられ、獅子を舞うことによって、村人が病氣・怪我などせずに長生きがで、農作物が沢山取れると信じて獅子を舞ったといわれています。

麻績神社の獅子舞は、『座光寺村史』等によると1789～1800年(寛政年間)頃、当時の若連中が神社祭典の余興として始めたといわれています。

獅子曳きはいつごろから始まったの

麻績神社の獅子舞は1810年(文化7年)頃の記録に「獅子舞」と記した今村家日記があります。梅丸・松丸・桜丸の三兄弟であったとは、いいきれませんが。三兄弟の獅子曳きについては1900年(明治33年)に書かれた日記もあり、この頃から三兄弟の獅子曳きがあったのではと思います。



獅子舞仕草

獅子曳きはなぜ歌舞伎風を取り入れたの

江戸時代から昭和初期にかけての伊那谷は、大変歌舞伎が盛んな地域でした。そこで1871年(明治4年)村民の熱意と努力により、歌舞伎舞台を建てる計画がなされている中、1872年(明治5年)に「学校を造りなさい」



獅子

との国からの指示があり、この翌年、歌舞伎舞台を伴った学校造りの工事に伴って、1874年(明治7年)麻績小校として開校しました。このように歌舞伎に寄せる思いも強く、歌舞伎風にしたのではないかと考えられます。

なぜ梅丸・松丸・桜丸の三兄弟の獅子曳きにしたの

下伊那地方は、獅子を舞う地域が多く、獅子曳きを伴った獅子も随所に見受けられますが、麻績神社の獅子曳きは、なぜ梅丸・松丸・桜丸の三兄弟なのでしょう。それは、歌舞伎の名作「菅原伝授手習鑑」の中の「車引」において、松丸丸が仕える主人の乗る車に先だって、神社に参詣に来た時、別の主人に仕える梅丸丸・桜丸丸がその列を阻もうと争います。その時、三兄弟が同じ童子の格好の衣装を身につけ、車の前で荒事を演じております。この時の車を獅子に置き換えて、三兄弟が獅子を曳く形にしたものと考えられます。

獅子曳きの三兄弟が頭に付けている物はなに

三兄弟が頭に付けている物は、「鬘斗」といいます。鬘斗は方形の色紙を細長く、上が広く下が狭い六角形に折

りたみ、その中に伸アワビを小さく切って貼り、連物に添えるものです。鬘斗を添える事によって、丁重に、また自分が喜んでする好意であることを表し、とくに御祝事に使われます。このようにおめでたい鬘斗を三兄弟の頭につけ、獅子舞に新しい演出を加えたものと考えられます。

獅子曳きの役目、天狗の役目について教えて

一説によると、麻績神社の獅子は盲目で、しかも大変な暴れ獅子といわれています。右後から襲いかかる獅子を手綱で叱り叩きます。次に左後から襲いかかる獅子を手綱で叱り叩き、そして真後ろから襲いかかる獅子を叱り叩きなだめます。獅子がおとなしくなった所で、麻績神社の方角を指差し「あそこの神社へ行くのだぞ」と教えます。このように三兄弟が力を合わせて麻績神社まで連れて行き、獅子を奉納します。このように獅子曳きが行う一連の動きを「仕草」といいます。

獅子曳き・獅子の前後につくのが天狗です。天狗には赤天狗・青天狗がいます。青天狗の嘴はカラスの嘴に似ているために、カラス天狗といわれています。赤天狗は獅子曳きの前方に、青天狗は獅子の後方について共に獅子曳きと獅子を守ることが役目です。また獅子曳きは神様のお使いといわれ、獅子を曳く以外は自分で歩くことをせず、三人の「獅子曳きかつぎ」の肩に担がれて移動します。



獅子曳きを守る赤天狗、青天狗

お囃子(囃子屋台)について教えて

笛や太鼓で屋台の中で「お囃子」をはやします。古くは青年団が務めていましたが、現在は有志による笛クラブの皆さんが中心となりはやしています。今日では、後



獅子曳きと越後獅子

継者の育成に力を入れ2000年(平成12年)より小学生の有志と共に練習にはげ、祭り本番を盛り立てています。

赤い頭巾をかぶり小さい獅子頭をつけ、胸の前に太鼓、両手にバチを持って「越後獅子」を踊るのは20才前後の未婚の女性です。越後獅子の踊りは長唄の歌舞伎舞踊に基づくものであり、1925年(大正14年)阿島の先生から習い、祭りに取り入れられたのは昭和8・9年頃といわれ、21才から25才の男性が務めていましたが、1945年(昭和20年)頃より女性の役に変わったようです。



獅子曳きかつぎ



屋台・越後獅子